

## パズルのピースの本質に

鞘路直崇

パズルのピースには、それとぴったり嵌まり合う隣のピースがある。

それをちゃんと見つけて嵌めていけば、いつか一枚の絵が出来上がる。

そういうものでしょ？

でもあの人は違う。

ぴったりは合わないけど、頑張れば嵌まらなくはないピースがあって、そういうのを繋ぎ合わせて、一つの塊を作るんだ。

僕には、最後のピースを嵌める前と後で、どうして後の方が良いのか分からないし、どうしてそこでやめるのが良いのかも分からない。

僕はそれを綺麗だと思ったことはないし、面白いと思ったこともないけど、綺麗だとか、面白いだとか言っている人が確かにいる。

そう思う人がいるのなら、あの人が長い年月をかけて、それを作るのを上達させた甲斐があったんじゃないかなと思う。

僕ももしかしたら、長い年月をかけてそれを見続けたなら、それを良いと思う日が来るのかも知れない。

だけど僕は、あの人に嵌められているピースを見ると、窮屈で可哀想だと思ってしまう。

どんなピースにも、それとぴったり組み合うべくあるピースがあって、それをそっと嵌めてあげることが、唯一ピースの本質に適うことなんじゃないの？

僕はそのことを忘れてなくて、あの人のやり方に慣れてしまわないように、予防線を張っている。

ところがあの人は、僕と真逆のことを言っているのに、結局おんなじことを言っているんだ。

ピース自身の嵌まりたいように嵌めてあげるんだって。

まるでパズルのピースにも、本質に先立つ何かがあるかのような言い方で。